

ハーメンと生き物たち

水 藤 昭 子



教会堂のかたわらにある、古い小さな牧師館にすんでいたハーメン君のお話を書いてみよう。その古い牧師館は、小さな楽しい保育園につづいている。だからハーメン君の家の中は昼でも夜でも絶えまなく、子どもやおとなが入り出している。その上、動物が幾種類も住んでいる。飼われているばかりでなく、あちらこちらから集まって来て、鳩は飛び交いチャボやトウテンコウは子どもらと共に散歩し、兎も庭をはねまわる。猫はじゃれ、卵からかえったばかりのあひるの子どもも育って、迷子の犬もそこにいついて、皆ハーメン君と子どもたちが大好き。

夏のひるさがり、千曲川に魚つりに行っていたハーメン君は、

「ハイ、オバサン、うなぎだよ」

と、背中に手をまわし、シャツの間からひっぱり出した長いものに、

「まあ」

と、一瞬、まわりにいた人たちは、吸いよせられるように見入ったが、次の瞬間、悲鳴をあげて逃げ去った。

「蛇じゃあないの、ああ、ハーメン君、お願い、その蛇、ここいらではなさないでね」

遠まきにして、彼の手にぶらさげられている蛇を、保母も子どもたちも、物珍らしげに、キャアキャア騒いで眺めている。

彼はへびを水道の水で、魚でもあらうようにジャブジャブとあらうと、自分の手拭いでシュルリシュルリと拭いてやり、胸の中にしまいこんで、梅酒を戸棚から出して来て、蛇に飲ませはじめた。

蛇の口を左手で開き、右手にスプーンを持って梅酒を流しこんでゆく。

畳の部屋の大きなテーブルの上にへびは観念したようにとぐろをまいてすわり、彼にされるままに梅酒を飲んでいく。

梅酒をのませおわると、彼はとぐろをまかせて、左手の上のせ、新聞を読みはじめた。蛇は逃げようともせず、彼の手の上に休む。そして時々かまぐびをあげて、細くてふたまたにわかれた舌で、彼の頬をなめる。

「オイ、くすぐりたいぞ」

彼は、全く友だちに言うように蛇に話しかける。蛇はまるでハーメン君の心がわかるかのよう、かまぐびをくねらせ

て、シュルシュルと頬をなめる。新聞を読みおわると、

「ねむろうぜ」

と、蛇を箱にしまいこみ、その箱を冷蔵庫に入れてしま

う。

「冬眠だ」

と彼は言う。

「さわってみてよ。蛇はとってもすべらかな体をしているんだ」

と彼はいう。二、三日彼はこうして蛇と遊んだ。園児たちは蛇を新聞紙でつくりはじめた。そしてこの不思議な高校生のお兄さんをまねた。

「さて、家に帰るか？」

と、彼は蛇に言った。梅酒をたっぶりのませて、彼は名残りおしそうに蛇を背中に入れた。そして、自転車にのって、千曲川へゆき、つかまえた所まで行って、蛇をはなしてやったという。

「あの蛇、すぐ行ってしまわないんだよ。ホラゆけえ、ホラゆけえと、草むらに僕が追いこんだのさ」

その日からどのくらいたったであろうか。秋の日の或る夕暮れ、

「蛇だあ」

と騒ぐ声にとび出して行った彼は、子どもたちから蛇が縁の下にもぐって行ったことを聞き、彼も早速縁の下にもぐりこんで行った。

「みつからなかった」

と、はいだして来ると、今度は家の中の畳をあげ、床板をはぎ、床下へもぐりこんで行った。その素早さ、その一念、しかし蛇はみつからなかった。

またしばらくして、奥の方に住んでいる宣教師が、

「ハーメンさん、蛇です。地下室に入って行きましたよ」

と、呼びに来た。地下室は納骨室だがその一かくを除いて、あとは地下物置になっているので、彼は、その物置にもぐりこんで蛇を呼んだ。蛇はみつからなかったが、まわりの人たちの考えでは、それはきつと、あの時の蛇じゃあないかという。蛇をはなした千曲川からハーメン君の家までは、四キロメートル以上はあるし、ハーメン君の家は自動車の激しくゆきかう、町の真中にあるのだから、普通に考えれば、蛇のそんな話は想像もできない。

彼は十歳の時、深い山奥へ、教会の友たちとキャンプに行ったことがある。その時、

「ハーメン、蛇だ」

と騒ぎがおこった。彼は蛇の側へ走りよって、蛇をつかまえて、水筒の中へ、尾の方から入れた。蛇は、暑い最中だったから、水に体をつけてもらって、快よさそうに頭だけを出してハーメンの腰にぶらさがって、いっしょに山を登って行った。ところが蛇のきらいなリーダーから、蛇をにがすように命令され、彼は、蛇を頭の上にすわらせて帽子をかぶってかくし、とうとうキャンプ場まで、無事蛇をつれて行くことに成功した。彼はもう蛇に夢中で、団体の中の一人としてその行動をわすれ、蛇といっしょにまどろんでいた。すると、その時大変なことがおきてしまった。蛇のにおいが彼の頭にのこっていたためであろうか。蜂におそわれてしまったのだ。彼はたちまちふくれあがり、山を下り、注射をうけて、一夜その毒と戦うために苦しんだことがある。

ハーメン君、彼は、危機の連続で育ってゆく人間であった。種がからをやぶって成長する時のように、破壊と危機の連続であった。

「ただいま、かあちゃん」

病気でねている母親の枕辺にすわった彼は、ポケットとい

うポケットから、「こうもり」を出して見せた。どれもこれもちがった顔をしていて、彼の手の中でおとなしく、母親をみているのだ。

「洞穴にいたんだよ。太郎山の洞穴に僕が入ってゆくとね、バタバタと何かが僕の側をすりぬけてゆく。そこで僕は脇の下ではさんでつかまえてしまったのさ、さて、これを地下室に飼うことにするか。それから、保育園の天井にもぶらさげておこう」

彼は、小学生の頃から山にゆかない日はなかった。山といっても、彼の子どもの足で、ふもとまで四十分はかかるだろうか。毎日のように母親をハラハラさせ、ある時は日暮れても帰って来ないので、彼の成長の期間、母親は毎日、山をみてくらししていたようなものである。

学校の先生からは、この危機と冒険の連続におびやかされて、時々手紙がとどけられた。

きょう彼は、こおろぎをしらべる時間に、こおろぎが逃げ出すからといって、こおろぎを口に入れ、ほおばって、勉強をした」

「きょう教室からいなくなつた。どこへいったか心配していたら、彼の足もとに大きなひきがえるがあそびに来たの

で、彼はそれを抱いて教室を抜け出し、庭のすみで、かえると遊んでいた」

そうしてだんだん幼い日にさかのぼってゆくと、彼「ハーメン」は、トンマで危険な、涙と笑いの人であった。

しかし彼はまた、平和と愛と祈りの人でもあった。

カナリヤを十羽ほど飼っていたことがあった。子どもたちは毎日水を替え、餌をやり、カゴをあらい、小さい力でいっしょうけんめいにつくしていたが、ある朝、ハーメンの不注意で、カナリヤが籠から逃げ出した。忠実な犬は、走って来て、それをとりおさえ、口にくわえて持って来た。

「ありがとう」

と、ハーメンは、犬の口からカナリヤを受けとったが、すでにカナリヤは死んでいた。ハーメンは、涙をポロリとこぼしたと思うと、突然耐えきれぬように泣き出し、家に入り、いつも彼の祈る場所に坐り、祈禱書を手に祈りはじめた。

「あわれみ深き父よ。我らは思いとことばとおこないをもつて、多くの罪を犯し、幾度となく主にそむきしことを、悲しみてさんげし奉る。願わくは、我らをあわれみ、我らの罪をことごとく許し……」

泣きじゃくり泣きじゃくり、彼のささげているのは、懺悔の祈り（聖公会祈禱文）であった。母親はその姿に感動し、七歳の彼と共に祈った。弟や妹たちもぞろぞろとついて来て、共に祈るためにひざまづいた。

教会の庭にはよく猫の子が捨てられる。彼らはそれを拾って来て育てようところみる。試みるが、なかなか育たない。死ぬ。そして泣く。彼らはかわい仔猫たちを抱いて、母親が彼らにできるように祈りもする。ある時、ようやく育ちそうだった仔猫が、こたつの中で一酸化炭素で中毒死という事件がおきてしまった。

ちょうどその時、ハーメンの弟や妹たちも勉強をし、絵を書いているという、とても静かな時だった。となりの部屋で父親がふとんを敷こうと掃除をしていた。そしてその時、死んだ仔猫がこたつの中から発見された。

母親が驚いて近より、仔猫を抱き上げた。六歳のナコは「ワァ」と母親の肩にかぶさって来て泣き、九歳のハーメンは、鉛筆を持ったまま、その場に立ちすくんで泣きはじめた。八歳のタークンは、悲しみに打ちかとうと、唇をとし、四歳のオーブは、自分はどうしたらよかるうかと、しょんぼ

りとして、この兄や姉の悲しみに包まれていた。

母親は背にかぶさって泣いているナコをそのままおぶって立ちあがり、台所へゆき、エプロンで涙をふきふき、空箱の中から一番きれいな桐の箱を持って来て仔猫をいねいに箱の中に入れた。ナコは泣きじゃくりながら、

「マリはかわいそうよ。箱に入れてはかわいそうよ」

と言って、何度も頬ずりをし、腕の中にかかえては、ただ泣きつづけている。

「かあちゃん」

と、二番目の男の子が母親の側に来た。

「ハーメンちゃんもナコも泣いちゃった。でも僕は泣かないよ。かあちゃんも泣かないでしょう」

子どもの前では泣くまいと、何事がおきてもいっしょうけんめい、涙を見せないですごして来た母親は、涙でうるんでいるこのタークンの顔をみつめた。そして静かにくびをふって、エプロンで涙をふいた。

さんざん泣いて、それから子どもたちは誰いうとなく、仔猫のためにいろいろなものを創りはじめた。ナコは紙に仔猫マリの絵を書き、ハーメンはベニヤ板に、一メートル程の十字架をきりこみ、彫刻刀で「昭和三十三年二月二日 マリの

墓」と刻んでゆく。タークンはボール紙で塔をつくり、オーブは絵をかいている。部屋は紙ぎれと、クレヨンと、板ぎれとで、足のふみ場もない程にちらかる。父親と母親は、全身全霊をもって、この悲しみを見守るために静かに子どもたちの中にすわっている。すすり泣きの、その静けさの中から、突然四歳のオーブが尋ねた。

「どうして、こたつの中にいると、死ぬの？」
八歳の男の子がまじめな顔で静かに答える。

「あのなあ、炭火の中に悪いガスがあるんだぞ。だから忍も、こたつでねる時は、もぐらないようにするんだぞ」

「まるで、僕らに、気をつけるって……」

と言いかけて、ハーメンはまた泣く。

「マリを埋めてしまふなんていやだわ。淋しがるわ」

と、ナコは母親に、どうしたら埋めなくてよいかと真剣にたずねる。死ということを悲しんで、多くの人がそのことを考えたんだけど、死は「チリに帰る」(創世記)ことだと、母親は教える。どんなに淋しくても、そうして別れなければならぬことを。すると、ハーメンは、

「マリの墓の上を、保育園の子どもたちが踏んで歩くかも知れない」

と、すすり泣く。

「ハーメンのつくった十字架をたてておけば、大丈夫。マリの墓だもの、誰も踏んだりしないでしょう」

二人は猫の死骸をかわるがわる抱きよせ、ほおずりしては泣き、

「もうちょっと気をつけてやればよかった」

といっっては、心づかいのたりなかったことをくやんでい

る。そして、ナコは、マリの箱の上に十字架や花や小鳥の絵をかいては重ねてゆき、

「これはマリだけに見せるものなの。だけど、ママだけに特別にみせてあげる」

と、その紙ぎれを、そっと持って来て、母親に見せる。

「タマがどんなにおどろくだろう。そして哀しむだろう。だから、タマにはみせないで」

ハーメンは、そういって、タマという大きい猫のことまで考える。その日はちょうど日曜日だったので、七時から母親といっしょに礼拝堂へ晩禱に行った。いつものけんかはどこへやら、子どもたちはいっしょうけんめい、マリのためにお祈りをする。涙ふきふきお祈りをする。

「まるで、マリのためにお葬式ね」

母親が、そっと子どもにささやいた。

ある日ハーメンが例によって仔犬を拾って帰って来た。黒い仔犬で、まだ眼もあいていない。ずぶぬれのその犬に、彼はミルクを飲ませていたが、飲まぬといって泣き出した。人にかくれて泣いていた。お便所の中にかくれて泣いていた。

「かあちゃんがいけないんだ、かあちゃんがいけないんだ」

母親はずぶぬれの仔犬を抱きあげ、かわいた布でくるくる水気を拭きとって、こたつに入れて暖めた。

「ニャーン、ニャーン、ニャーン」

と、仔犬は仔猫のように泣いている。ナコは庭からあがって来ると、

「かわいそう、かわいそう」

と、頬をすりよせ、セーターにくるんで、そっと大事に抱いている。母親はミルクを少しあたためてお茶碗に入れると、

「タアクン、スポイト持って来て」

タアクンは持って来たスポイトで、仔犬の口に暖かいミルクを流しこんでやる。

「オーブは、ミルクのコップを持って」

タアクンの命令で、オーブはミルクのコップを持って来て、兄の前にすわる。

母親は、便所にハーメンを呼びにゆく。

「仔犬は少し元気が出たようよ。ハーメンもう泣くのをやめなければ。ね、すぐ出ていらっしやい」

しばらくして、ハーメンは母親の側へ来た。口をとんがらせてやって来たのに、三人でいっしょうけんめいミルクをやって、それを仔犬がのんでいるのを見ると、ホッと笑いたいのを押えて、少し口をゆがめた。

「ね、やっど。よかったわ。でも、さっきかあちゃんがわるいって、とてもおこっていたけれど、あれはどうして？

ママは何か悪いことしたのかしら？」

母親がそう尋ねると、ハーメンは

「この間かあちゃんは……」

と、話し出した。母親は、それは自分ではなくて、どこかのお話の中に出て来る魔法使いのおばあさんの話ならよい、と思った。

「そうだったの。ごめんね。ハーメン。ママが悪かった。許して」

母親は、穴があつたら入りたいと思つた。

それは、こういう話だつた。この頃は、あまりに多い捨て猫や捨て犬のために、子どもたちの悲しみが大きいので、

「生まれてすぐなら、水につければ死ぬのにねえ。ただ捨てるなんて、こんなかわいそうなことないわ」

と、おろかなことを口にした。ハーメンは、それを早速実行してみたという。ところがすぐ死ぬどころか、水に入れるとおどろいてあばれたという。びっくりして水から出すと、セーターにくるんで、とんでうちへ帰つて来たのだという。

「ほんとうに」

と、母親は、心から子どもたちにあやまつた。

「ごめんなさい。そして、その仔犬をひろいあげて来たハーメンは、やさしい正しいよい子どもです」

それから、子どもたちは、あちらこちらに電話をかけて、いつものように仔犬のかい主になってくれそうな人を探した。

「僕、もういよ」

話を聞いて、一人の男の子がやって来た。ところが子どもたちの協議は「おことわり」だつた。

「あのうちのおばさんには、仔犬を育てることなんかでき

ないよ。きつと、すぐに捨ててしまふよ」

近所のお寺の女の子が、仔犬をもらいにやって来た。

「あそこのうちならいいかも知れないね。みんなで行つておばさんに聞いてみよう」

行つたとたんにことわれ、お寺の女の子は大声で泣きはじめた。子どもたちが途方にくれて帰つて来ると、

「もう、冷たい風がふいて来たから、おうち探しはやめて、今夜はここにとめましょう」

と、母親は子どもたちに言つた。

「ウワイ。ばんざい、ママありがとう」

ナホは母親の胸にとびつき、男の子たちは背中にとびつき、よじのぼつた。さつきまで笑わなかつたタアクンが、はじめて笑つた。そして、わざわざ耳もとに口をよせて、

「かあちゃん、ありがとう」

と、ささやいた。

夜が来た。籠におふとんを敷いて、タアクンは自分の枕元に仔犬をねかせ、ハーメン君は根気よく、あちらこちらに電話をかける。やがて、子どもたちが安らかにねむつた。母親は、子どもらの枕辺にすわり、おろかな言動をさんげし、子どもたちへの正しい導きを、神に祈つた。

夜中になく仔犬に、母親は困惑し、脱脂綿にひたした牛乳を、根気よく吸わせ、仔犬を抱いて一夜をすごした。

さいわい、仔犬は二日程して、近所のチビという犬に乳をのませてもらうことになった。チビにも仔犬がいっぱいいるのに、よくそんなことができるものだ、子どもたちは感心していた。しかし三日目に家に帰されることになる、ハーメンは乳首を買って来て、乳を飲ませた。保温にも注意して、五日ばかり仔犬はようやく育て行つたが、子どもたちが公園へ遊びにつれて行つた次の日に、下痢をして、仔犬は一晚中泣き、血便をして死んだ。

翌朝、母親は子どもたちに言った。

「クロは病氣よ。さわってはいけません」

子どもらは、クロは眠っていると思つて、静かに足音のばせて学校へ出かけて行つた。

思案のあげく、病氣が子どもたちにつるのを恐れて、子どもたちのいない間に、父親は、仔猫の墓のとなりに穴を掘つて、クロを埋めた。そして、その上に墓標をおき、花を飾つた。

保育園に行っていたオーブは、一番早くクロの死を知つた。

「ハーメンたちには、何と話そう」

そう思つて思案している時、遊びに来た大学生に話しかけているオーブの声がした。

「佐藤さん、クロが死んだよ。そして、ほら、あそこにパパが埋めた」

「えっ、そうかあ。かわいそうだったなあ」

そういつて彼は、南の窓辺に腰かけた。そこへ子どもたちが帰つて来た。母親は勇気を出して言った。

「タアタン、クロ死んだわ」

彼は「フン」と言つて、どこかへ行つてしまった。

「ナコチャン、クロ死んだわ」

ナコは、眼をきつと見開いて、問い返した。

「ほんとう？」

ナコは、こたつに坐りこんでうつぶした。陽気な歌声が聞こえて来た。

「あつ、ハーメンだ」

母親は緊張してだまつた。ハーメンは仔犬が今朝はよくねむっていたので安心しているらしく、何も問はず、おやつを食べはじめた。そして大学生にいろいろ話しかけている時、書齋からおりて来た父親が、いっしょうけんめいたてつづけ

に話しはじめた。

「ハーメン、クロは死んだよ。下痢がひどくなつてね。ピタミンもおなかのくすりのませたけれど、血便もして。あれはもともと小さすぎたんだ。母犬の側からはなれるのが早すぎたんだ。助からなかつたんだ」

「エッ？ クロが死んだの？」

ハーメンは立ちあがつて、父親の前にたたずんだ。

「ウン。かわいそうだったね」

ハーメンの顔は、たちまちゆがみ、母親の側をだまつてとおり抜け、戸を押しあけ、便所に入ってボタンと戸をしめた。台所の網戸が、そのあともギイギイと鳴つて、妙にものがなしい静寂が残つた。

「ハーメンは泣いているんだね」

父親は母親にそうささやくと、母親は、めんどうくさそうに、「ええ」と、答えた。それは、母親もまた、声を出せば、大声で泣いてしまう心配があつたからだ。

夕暮れ、オーブは、兄や姉たちを墓へ案内していった。

「誰が、この墓つくつたんか？」
オーブが言った。

「パパだよ。病気がみんなにうつらないようにって、パパがうめたの」

子どもたちは、墓の前にしゃがんで日の暮れるまで、生きている仔犬にするように、砂をかけ、山をつくり、花を飾り、石をならべ、語りあつていた。

いま私が、保育園の子どもたちに話しているとき、「ハーメン」と言うと子どもたちの眼はかがやく。このトンマで危険でやさしいユーモアのあふれるお話の主人公が、子どもたちは大好きなのだ。彼らにとってハーメンは、彼ら自身の心だからだと思う。

ハーメンは、今、ある牧場の獣医として働いているが、今のところ彼の恋人は牛だけで、それもあいかわらずのトンマ。危機と、冒険の連続で、牧場長を怒らせたり、笑わせたり、牛にはけられたりなめられたりして、生活している。数限りないハーメンのエピソードは、彼の中からわきあがる魂の歌そのものだと、私は思っている。

(上田・聖ミカエル保育園)